

2017年7月30日(日)

説教:「顔に汗を流してパンを得る」

聖書:創世記3:1～19

このエデンの園の話で一つの疑問が生まれる。何故神は、食べてはいけない果実を生えいでさせたのか?・・・という疑問。このことは神がより人を愛するがゆえであるという。人間の側に神を選んでいく、神の道を選んで生きる心を与えておられるということ。ロボットのようにコンピューターを埋め込んで主人の思うがままに動くものではなく、人間が自分の意思で、神に仕えて行くということ。このことは神が人を愛するがゆえにある。神から離れて行く人であっても、戻ってくることを信じておられるということ。あのルカ福音書の放蕩息子の話を思い出す。神は私たち自身を信じておられる。

蛇は女に言う。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」と。神が与えてくださった私たちの自由意思は、神の思いから離れて行く。二人は「裸」であることを恥じるようになる。ここでの「恥」とは「弱さ」のこと。自分の「弱さ」、人の「弱さ」を見てそれを恥と思い始めた。私たちの社会は、「弱さ」＝「だめ、恥ずかしい、さげすむ、貧しいこと」と世間一般的に捉えがちである。逆に「強さ」は、尊ばれ、褒められ、誇りとなる。そういう「弱さ」と「強さ」の囚われの世界に罪ははびこることを聖書は教える。

この「弱さ」と「強さ」の囚われの究極の世界は「戦争」。戦争では弱い者は辱められ、苦しみ殺されて行く。強い者が勝者と呼ばれ、人を多く殺せば殺すほど、勲章をもらい、国の英雄になる。このような世界には、神など必要がなく、強さこそ神であるかのように振る舞う。そういう私たちの神などいないかのように振る舞う世界において、神ご自身は「どこにいるのか」と私たちを探し続けておられるのである。

最後に、《お前は顔に汗を流してパンを得る／土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。》この世に生きるとは「顔に汗を流してパンを得る」事だと教えている。人は皆、土に帰るもの。神によって造られた人間の間に弱い者、強い者という差別があってはならない。人は皆、等しくあるべきだと教える。もう一度、この世に生きるとは「顔に汗を流してパンを得る」こと、それをしなくなる時、人は道を誤る。

イエス・キリストを信じて、この世で歩む、生きるとは、“顔に汗して信仰に励む”ということになると思う。(神谷)